労協連だより

古村 伸宏

いよいよ総会・総代会まで２週間をきった。やはり今年は、議案作成やその討議も、例年とはまったく異なる水準のように感じる。特に、震災による甚大な被害を受け止めると同時に、そこからの復興と社会全体のあり方を見直そうという機運は、大変大きいと感じる。また、その中で「協同労働」、「仕事おこし」、「法制化」が、現実的な課題として位置づいていくようにも思う。前号で記した「F（食べ物）・E（エネルギー）・C（ケア）」自給圏の提起も、具体的に何をどうすることで可能になるのか、という議論が期待できそうである。また、「公的訓練・就労事業」制度は、総会当日には考え方やイメージも含め、具体的に提起することになると思う。生活の保障と安定、就労機会の確保、未来の仕事への志向をひとつに括り、この事業を地域産業の創造・市民自治の確立の要として描く、最も緊急性の高い、しかも普遍的な公共性を問うものとなりそうだ。

我々の協同労働の全国組織も、今回の総会・総代会を契機に、その本部機能を分散化していく試みを始めるが、全体の事業・運動を貫くテーマは、「地域・市民主体の復興・再生」を全国共通課題とすること、その要に、仕事おこしと社会連帯を地域から創造していくという流れをつくり出すということである。これをリードする新しい本部像・全国組織像の模索が始まる。

総会・総代会では、特別企画が二つ用意されている。一つは、原発問題を扱った映画「ミツバチの羽音と地球の回転」の上映と鎌仲ひとみ監督の講演、もう一つは岩手県野田村村長と気仙沼で牡蠣の養殖を営む漁師・畠山重篤氏（NPO森は海の恋人代表）によるパネルディスカッションである。総会・総代会の議案を深める意味で、こうした企画を組むのは、もちろん初めてのことだ。しかし、時代的・社会的な自分たちの立ち位置を確認し、進むべき方向を見定める歴史的な転換点としては、必須の企画をなるだろう。できれば、外部の方々とも議論を深めることができれば、一層覚悟と決意も固まるだろう。

大震災の影響か、気がつけば早くも1年の折り返し点。今年の夏は、特別の暑さと汗にまみれることだろう。歴史の転換点は、新しい出会いを生むだろうが、厳しい別れの選択も突きつけられるかもしれない。だが、「生命」の本質に適った選択を、賢明に重ねるしかない。命には生きる力があるが、それを生かす環境がなければ、その力は萎む。その環境こそがFECの自給圏であるが、命を生かし合う環境としての「ケア」が、ますます重要視される時代が始まろうとしている。